

「出会った手から見えた看護」

私が看護学校に入学し、約1年が過ぎた。将来は看護師になりたいという夢は今も変わらない。しかし、入学前と今とでは、看護に対して、命に対しての考え方が変わった。入学前は看護師として働く母から、病気の患者様を支えるやりがい聞き、私もそうなりたいたと漠然と思いをはせるだけだった。いわば、患者様を支えてあげられる自分になりたいただけで、支えの中にある患者様、その家族のことは気に留めていなかったのだろう。

そんな私の思いを変えたのは、1年生の間で出会った2人の手だった。ひとり目は、解剖見学実習でのご献体の女性である。私は、この機会を迎えるまで、人の死に接した経験がほとんどなかった。唯一、祖父の死のみだった。その時でさえ、何とも言えない恐怖心からその身体に触れることができなかった。そんな私が解剖実習室にて、ご献体の女性と出会った。恐怖、戸惑い、感謝。思いはあふれしばらく冷静にはなれなかった。そして、身体に造りや疾患部位を見て触れてしていくうちに、ふと学習の対象物として女性を見ていた。そんな時、女性の左手が視界に入った。一気に女性の人生が見えたような気分になった。誰かと共に生き、尊い人生を送ってきたかけがえのない存在であることをその左手が教えてくれた様な気がした。私はその左手に触れ、「これからあなたのような病気を抱える人の人生を支えていきます。」と伝えた。ふたり目は、病院での臨地実習で、私の担当患者様だった、ご高齢の女性の手だ。その手から多くを学んだ。食欲がなくそばに置いていたウエハースを払いのけた時、寒さから震えていた時、昔の恋人の話に涙を拭いた時、私の至らないケアに感謝して握手して下さった時、その一所作一所作に意思があり、人柄があった。看護をしていく上で、些細な手の動きでさえもニーズを紐解くヒントがあると分かり、ケア以外でもコミュニケーションをとる中でその手を握って差し上げることで心が通い合うこともあるのだと学んだ。

このふたりの手を通し、看護とは対象となる患者様の人生に触れ、手助けするためにあると感じた。その手、その心と繋がる時、決して自分主導になってはいけないこと、何を伝えようとしているのか、身体が発しているメッセージを代弁することが看護師としての基盤になるのではないかと思った。

最後に、今の私には、十分な看護知識、コミュニケーション能力はない。これから多くの手との出会いを重ねることで看護を学び成長していきたい。